

---

# まぶしい人は嫌いです

ちゅんた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まぶしい人は嫌いです

### 【Nコード】

N5714Y

### 【作者名】

ちゆんた

### 【あらすじ】

なんともまぶしいイケメン野郎に懐かれてしまった、地味ライフ絶賛満喫中の安藤奈津。

「ナツ先輩！」

「話しかけるな！」

地味ライフを取り戻したい、突っ込み気質な彼女の日常生活のお話。

## ここ最近の不満（前書き）

初投稿です。

軽い気持ちで読んで頂けるとうれしいです。

## ここ最近の不満

自分で言うのもなんだけれど、私は地味女である。

肩より短い黒髪をちょこんと両サイドにみつあみにして、制服のスカート丈はいたって普通。

いや、膝上5センチくらいなので長めなほうだ。

特に親しい友人もなく、基本的にいつも一人行動をしている。

かといって、特にいじめられているわけではない。私のクラスは実  
にのんきな人たちばかりで、普通に話もするし挨拶だつてかわす仲  
だ。ただ特別に仲がいい人がいないだけ。

ちなみに私はそんな生活を、とーっても満喫している。

私は目立つこと・面倒くさいことがなにより嫌いだ。地味で友達が  
いない今の生活はとつてもラクですごく最高。

そんな私の生活は単調である。部活も委員会も所属していない私は、  
学校が終われば徒歩10分の場所にある家へとまっすぐ直帰する。

そして家の隣にある「セボン又安藤」という名の喫茶店への扉をあ  
ける。

「おじいさんただいま」

「奈津おかえり」

コーヒー豆を挽いている香りをかきながら、私は制服のジャケット  
を裏部屋へ放り投げエプロンを身につけた。

毎日、私のおじいさんが経営している喫茶店を手伝っているのだ。

(ちゃんと給料はもらう)。

「今日、一人もお客さんいないね」

「そろそろ混みだすんじゃないかな」

おいおい、おじいさん。

意味深な発言じゃないですか。

そう思った矢先のことだ。

喫茶店の扉がバーンと勢いよく開け放たれた。

「ナツ先輩！ひどいじゃないですか！なんでいつつもいつつも先に帰っちゃうんですか！今日俺バイトだって知ってるでしょ！？」

出たな。私の平穩を乱す不埒な輩め。

こいつはまきはらたくみ榎原工。私の学校の1学年下の後輩だ。

「知らないけど。あんたのシフトなんて」

「店長！ナツ先輩の部屋にシフト置いといてって言ったじゃないですか！」

「ごめん、コピー機の使い方わからなくて」

おい、おじいさんを使うんじゃない。

「もうっ！じゃあ今から言うつから覚えてください。今月は月・火・木・土なんで、月・火・木は一緒に帰りましょうね」

「知らない、その情報」あんたの後ろにいるお嬢さんがたが思いつきりメモとってますよ。ていうか、今日もどんだけ連れてきてんだ。おじいさんは大喜びだけど（売上のに）、私としてはうんざりだ。だって、榎原目当てのお客さんって若い女の子ばかりで、黄色い声がそこらじゅうにあふれるんだもん。うるさくてしょうがない。

栗色のさらさらな髪に、すらりとした細身の体。ぱちつとした大きな瞳にシャープな小顔。そんでもって人懐っこい爽やかな性格。

100人中100人が認める、嫌みのないイケメン野郎だ。榎原がバイトの日には若いお嬢さん方で埋め尽くされることになる。

はーあ、私はこんなまぶしい生き物とは関わりたくないですよ。人目も気にせず堂々と話しかけられると目立ってしょうがないんですよ。

しかも、よりによってこいつ人懐っこさ120%なんだよな。こんな地味女放つといてほしいんだけど。。。

「ナツ先輩、ぼーっとしてないで仕事してください」

いつのまにやら仕事モードへ突入していた榎原に叱られた。ちくし  
よう。

ついでに、おしゃれ度0%の真っ白エプロンを着こなすその感じに  
すら「ちくしょう」と言いたい。

「あんたが全部注文とりな」

「ひどっ」

「うっさい」

お嬢さん方の注文を私 گرفتたら、恨まれるっつての。  
決して叱られた腹いせではないのであしからず。

「おじいさん、やっぱりあいつクビにしようよ」「マキ君、いい子  
じゃないか」

はあ。。。この様子じゃ奴とは当分縁切れそうにもない。  
なんとか今までの地味生活を死守しなければ。

はーあ、めんどくさい。。。

**おびやかされる学校生活（前書き）**

クラスメイトには敬語な主人公。

## おびやかされる学校生活

地味ライフにおいて大事なこと。

遅刻などという目立つ行為は行わないのが鉄板である。

なので遅刻するかもなどというスリルとは無縁でいられるように、  
常々余裕をもって登校するようにしている。

「安藤さん、おはよ  
」

いつものように少し早めに登校した私を、前の席の高橋さんが待ち構えていた。

いつも挨拶をかわす仲だけでも、今日は体を後ろに向けている。

つまり私と話す気まんまん体勢をとっている。さらには、その表情がなぜかにやついている。

「高橋さん、おはよう……どうかしました？」

私が席に座るやいなや、高橋さんは身をのりだしてきた。

「安藤さんって榎原くんと仲いいの？」「イイエまったくですが」

なんだって!?

内心、目ん玉が飛び出るほどの衝撃を感じたが、私はかろうじて表情を崩さずにいることに成功した。自分ナイス。

「え〜、じゃあなんでだろ？」

「……何の話ですか？」

「昨日安藤さんが帰った後に榎原くんが来てさあ、「安藤奈津さんいますか？」って聞かれたんだよねえ。だから仲いいんだ〜って思



「ただだけど・・・」

「人違いではナイデシヨウカ。私はそんな人知りません。まったく知りませんが」

「でもフルネームで呼んでたけど。それに何回か来てるみたいだし。クラスの子も何人が話しかけられたって騒いでたもん」あいつ・・・そんなことしてやがったのか！

学校でそんなことしたら私まで目立つちまうだろうがぁ！

「おまえ榎原と仲いいの？俺に紹介してくんね！？」

急に話に割り込まれたので、声の主を見ると隣の席の山中君が登校なさったようだ。

「山中おはよ〜」

「おいーす。つか高橋足とじろよ。パンツ見えてんぞ」

「朝から盛るのやめてくんない？」

高橋さんに何か言いたそうな表情をしつつも、はあつとため息をついて話を終わらせました。そう、山中くんはやらねキャラなのだ。そんな彼は今はなかったかのように再び私へと向き直ると、不思議そうに眉をしかめた。

「・・・なぜ、俺をそんな目で見る」「山中君がBLだということとを、さらつと告白したことに驚いています」

「はあ！？ちっげーよ、なんでだよ！つか、そんなこと告白した覚えねーよ！」

「さつき榎原くん紹介してくれって言ったから、好きだと思ったんじゃない？」

高橋さんのアシストにうなづきながら、私はあわてふためく山中君

を生ぬるい目で見つめます。

「ばっか、お前！そういう意味じゃねーよ！サッカー部に勧誘するためだよ！」

なんだ。そうでしたか。

ち、つまらん。

「すみませんが私と榎原工とやらは、全くの無関係の赤の他人なので紹介することはできません。ちなみに彼が探しているのは、どこかのクラスの同性同名の女子ではないかと思えます。クラスを間違えるなんてバカな奴ですね、まったく」

私はこれでシラをきりとおします。

そして学校では奴の視界に入らないように、より一層注意深く行動しようと思いに決めた。

## 遭遇

なんということでしょう。

今朝気を引き締めたばかりだというのに。

一日の授業を終えて、さっそうと帰ろうとしていたところを榎原に捕まってしまった。しかも校門の前という、かなり危険な場所で。

「おいコラ、離せ」

「ナツ先輩、今日こそは一緒に帰れますね」

人の話を聞いちゃいない榎原は、それはそれはまぶしい笑顔を向けてくる。

がちりと私の腕を掴みながら。

ちくしょう。

もし今日も放課後迎えに来たら嫌だなと思って、担任の話が終わったと同時に飛び出してきたっていうのに逆にそれがアダとなったようだ。

6時間目が体育の授業だったらしい奴と、下駄箱でばったりとはち合わせてしまうとは思わなんだ。しかも校門まで追いかけてくるのは。

何が一番腹立つって、あずき色のダサイジャージを着こなしているあたりだ。

こんな今時珍しい芋ジャージが似合うのなんて、私ぐらいなのに！

「着替えてくるんで、ちょっと待っててください」

「ごめんごうむる」

「だったら俺のクラスまで一緒に来てください」

「勘弁してください」

「もー！俺にジャージで帰れって言っんですか？」

「手を離せって言ってんだよ！ついでに一緒に帰るといっ選択肢を捨ててくれと言いたい」

「じゃ、俺のクラス行きましようか」

「待てええ！なにが『じゃ、』だ！」

私の腕を掴みながら強引に教室へ行こうとする奴に対して、足をふんばって抵抗する。さっきからチラチラ人に見られてるのが気になっしょうがない。

これだから嫌なんだ。

まぶしい人間と一緒にいると、校門にいただけでも目立ってしまう。放課後の校門なのだから、これからあっという間に人も増えるだろう。

こうなったら奴の気をそらして、隙を見て逃げよう。

「ナツ先輩、おとなしくついてきてくださいよ」

「やだ」

「すぐ着替え終わりますから」

「やだ」

「こう見えても俺着替えめっちゃ早いんですよ」

「やだ」

「ナツ先輩？」

「やだ」

「ちょっと、生返事してるでしょ！」

あ、奴の気をそらす方法を考えたせいで生返事してたのバレた。

ぶつと頬を膨らまして拗ねる榎原。くそ！

イケメンでやつは、なんでもサマにしゃがる！

ふくれつつらを味方にできる男なんて小学校低学年までだぞ！

腹立つわ、本当に。」

「とりあえず腕離してみようか」

「やだ」

「一瞬でいいからさ」

「やだ」

「オイ」

「やだ」

「『やだ』返しすんな！さっきの生返事のこと根にもってんな、お前！」

なにコイツ。子供か！

「もー！なんでそんなに一緒に帰りたがるかなあ？」

「だって、同じとこ行くんだから別々に帰るほうが不自然ですよ」

むしろあんたと私が一緒に歩いてるほうが不自然ですから。

「それにせつかく知り合っただからナツ先輩ともつと仲良くなりたいですもん！それにはまず、じっくり話しながら下校するのが一番ですよ」

はい、出ました。

人懐っこさ120%！

うんまあ、悪い奴じゃないってことは分かってる。

むしろ、こんな地味な私と仲良くなりたいと言ってくれるなんて良い奴だ。

しかし申し訳ないが、まぶしい人種である君とは仲良くなれない。

私の願いは、静かに地味ライフ送りたいということなのだよ。

君と関わったら、まわりの人の好奇心な視線にさらされてしまうのだよ。

例えば「何あいつ。地味女のくせに身の程知らず!」的な女子の怖い視線とかね!

さらに言えば、なにげにうざいところ)&しつこいところ)も仲良くなれない原因だ。

私はイケメンっぷりを見せつけられるとイラっとする性質である。

どうやら私は世の中の女子とはまったく方向性のちがう女子のようだ。

「分かった、分かったよ。待ってるから。だから離して?腕痛いんだよ」

後半、多少演技してみた。

すると槇原はごめんなさいと言いながら力を緩めた。  
今だ!

体育でも見せたことのないスタートダッシュを決めてやった。

なにやら奴が「あー!」とか言ってる声が聞こえたが、逃げたもん勝ちだ。

後で何か言われるだろうなと思いつつも、とりあえず良しとする。

・・・ちなみにその後。

喫茶店でのバイト中、ずっと文句を言われ続けました。やっぱりうざい。

兄、登場（前書き）

今回つっこみまくりの主人公

## 兄、登場

今日はまったく最高の一日だった。

金曜日は私の大好きな曜日である。

嫌いな体育も数学もないし、毎週楽しみにしているドラマがある。そしてなんととっても喫茶店が平和（槇原がいないから静か）だ。さらにさらに今日は学校で槇原を一度たりとも見かけなかったので、こそこそと逃げ惑う（地味に疲れる）ことをしなくて済んだ！  
よって、私はなんとも最高に機嫌がいいのだ。

小粋に鼻歌を奏でながら、おじいさんと一緒に店を閉めて我が家へと向かう。

さーて昨日からじつくり煮込んで寝かせてあるカレーを食べよう。

さぞ美味しいのでしょうな。実に楽しみだ。

上機嫌でリビングの扉を開ける。

・・・色々とありえない光景が広がっていた。

「あ、ナツせんぱーい！おかえりなさいーい」

ありえないその？。

槇原が家の中にいた。

ありえないその？。

めったに家にいない兄が、槇原とテーブルをはさんで座っている。

そしてありえないその？！

ふたりでカレー食ってる！

え、それ昨日から煮込んで楽しみにしていた、これから私の胃に収



まるはずのカレーだよな！？なに食ってんの！なに勝手に食ってんの！！

「春・・と、マキくんじゃないか。どうしたんだい。めずらしい」

おじいさん。

めずらしいとかいうレベルじゃないからコレ。

確かに兄が家にいるのはめずらしいけども。

槇原に関しては突っ込むべきでしょう。

「二人は知り合いだったのかい？」

「いや、初対面」

おい！

なんで初対面の二人が仲良くカレー食ってんだよ！

「なんかコイツ怪しかったから、これから尋問しようと思ってたところ」

おい！

尋問って！しかもそんな奴にまずメシを食わすな！

・・とりあえず、兄は意味わからん人だから無視しよう。

「槇原、あんた怪しい行動って、なにしてたわけ？」

「えー別に怪しいことなんてしてませんよう。家の前で待ち伏せしてただけです」

「じゅうぶん怪しい」

「失礼な！ナツ先輩にお願いがあって待ってただけです」

・・・お願いだと？

聞きたくねー。絶対かなえてやりたくねー。

でも、気にはなるから一応聞いてみよう。

「あのですね英語教えてください。月曜にテストがあつて、赤点とつたら1週間補習になっちゃうんです」

「え、やだ」

「即答しないでくださいよ！言っておきますけど、俺が補習になつて困るのはナツ先輩のほうですからね。俺、バイト来れなくなっちゃうんですよ」

ちつとも困りませんが。むしろ願ったり叶ったりって感じですが。ていつかなぜ上から目線なんだコイツは。

「奈津、勉強ぐらい見てあげたらいいじゃないか」

おじいさん。

きっとあなたは売上の事を考えているのですが、私は嫌です。

「・・・コイツ、何者？」

急になんだ、兄よ。

いまさら。そして思いつき話の途中でしようが。

まあいい。いちいち兄に付き合ってたら日が暮れるので再び無視しよう。

「彼は榎原工くん。喫茶店のバイトをしてくれてる子だよ。それで、こっちが奈津の兄で春。マキ君は奈津と同じ学校だから春の後輩でもあるね。」

私と違って、おじいさんはきちんと二人の橋渡しをしてあげた。やさしいな、まったく。

「3年生のハルさん！ナツ先輩のお兄さんだったんですか？はじめまして」

榎原よ、にこにこ挨拶をしているけども。

君はもう少しでこの人に尋問をされる場所であつたのだよ。

「マキ君、春のこと知ってるのかい？」

「めつたに学校来ないけどハルさん有名ですもん。かっこいい〜ってクラスの女子が騒いでました」

そう、実は我が兄もまぶしい人種なのである。

どちらかというとなつぱい顔立ちで華奢なタイプだが、地味に筋肉ついたり背が高いので立派なイケメンに属している。

基本的に無表情（実はぼんやりしているだけ）なところや、黒髪なうえに黒づくめの服装を好んで着ているあたりが神秘的に見えるように、イケメンぷりに拍車をかけているようだ。

余談だが、そんな兄は何をかくそう不良である。

私としてはこんな意味不明なぼんやり男が不良だなんてやってけねーだろと思うのだが、一応そういう仲間とつるんでいるから不良の括りに入れている。ていうか学校めつたに行かないくせに、噂になつてゐるってどういうことだよ。

もうひとり腹立つ人、身近に発見。

噂のハルさんと私が、兄妹だということバレないようにしなければ。

「こいつ電柱に隠れてこそこそしてたから、ナツのストーカーだと

思ってた」

兄よ。よくストーカーだと思った奴を家の中へ入れたな。

「あんた、なにも電柱でコソコソしなくても・・・」

「だってナツ先輩、逃げるじゃないですか」

うう。

否定できない。

「無理やり家の中に押し入ってやろうと思って待ち伏せしてました。」

」

それはもはやストーカーと言っても間違いではないと思う。

おじいさん、目を覚ましてください。

彼はストーカー候補生ですよ。

被害者である私が、何故勉強なんぞ見てやらにやいかんのですか。そう訴えようとしたものの、おじいさんは既にいなくなっていた。

「・・・兄ちゃん、おじいさんは？」

「風呂」

「くそう、言い逃げか・・・。しょうがない、ただし1時間だけだからね。9時から見たいドラマあるんだから！」

「わーい！ナツ先輩の部屋楽しみ〜！」

はあ、最後の最後でどんでん返しをくらってしまった。せつかくいい一日だったと思ったのになあ・・・ちえ。

## 真夜中の攻防

榎原くん、君はいま何時か分かっていますか。  
深夜2時です。

私の特等席であるテレビのまん前を陣取ったあげくに、愛用のクッションを一人占めしてベッドに寄りかかっている榎原。それに対して居場所のない私は、ベッドの上に身を小さくして座っている。

むかついたから枕を投げつけてみた。

「お前もう帰れよ！」

「え、今いいところなんですけど。それに勉強まだしてないですよ？」

「あんたが悪いんじゃない！冬ソナのDVD・BOX勝手に引っぱり出してきて見始めたあんたが悪いんじゃない！」

「まさかナツ先輩の部屋に冬ソナがあるなんてねえ。見るしかないでしょう」

「別に韓流好きな訳じゃないし。もらい泣きとかしたことないし」

「出た、ツンデレ」

え、今のツンデレなの？

使い方あってる、それ？

あのさ、私9時から見たいドラマあるって言ったよね。

せつかく8時にはお風呂入って準備万端にしたのに、あんたテレビ独占し続けたよね。

そんなもって、英語の勉強はどうした！？

お前ぜんっぜん勉強してないじゃん！

ずっと冬ソナ見っぱなしじゃん！

そりゃさ、冬ソナは最高だよ。

見だしたら止まらないのも分かるよ。

しかも今おまえが見てる所超いいとこだよね。

サンヒヨクの顔むくみっぱなしなのが気になるけども、泣けちゃうとこだよね。

「もう夜も遅いんでこのまま泊っちゃいます」

それ、こつち側が気を使って言うセリフなんですけど。

「もー、帰れよ！眠いんだよ私は！冬ソナ貸してやつから！」

「牛の刻参りに行くわしたらどうしてくれるんですか？三脚を頭にのせてわら人形もってる人に追いかけられたらどうしてくれるんですか？」

うん、それは怖い。

深夜2時だもんね。怖いよね。

なんか想像してみたら体が震えた。

「ちょうど明日バイトなんでここから行くほうが楽ですし。そんなもって英語は明日のバイトの後でよろしくお願いします」

「え、なに？明日もうち来るつもり？勘弁してよ。ていうか泊まるの許可してないんですけど」

「牛の刻・・・」

「だあっ！もう分かったよ。勝手にしろ。リビングのソファーにブランケットあるからそれで寝て。私はもう寝る！」

「はい、おやすみなさい」

もうダメだ。諦めよう。

冬ソナに魅了された今のこいつを止めることは難しい。

なにより私の眠気がもう限界だ。  
布団にもぐって目を閉じた。

『ユジナー、ユジナー！』

『ミニヨシー！』

・・・冬ソナうるせー！

「ちょっと、私もう寝るって言ってんじやん。うるさいんですけど」

「あ、ごめんなさい。音下げますね」

「ちげーよ！リビング行けって言ってんだよ！」

「一階で店長寝てるんですよね？起こしちゃいませんか？」

「私は起こしてもいいってのか」

でもまあ確かに、おじいさんに迷惑かけるのはいけない。  
音に敏感だから起こしてしまう可能性は十分ある。

「んじや兄ちゃんの部屋にでも行って。どうせいないだろうから勝  
手に使っても平気だと思っ」

「ふざけんな」

え？なに今の。

まさか榎原？いやさすがにこんなこと言う奴じゃない。

声のしたほうを見ると、なんと兄がドアに寄りかかってDSを  
しているではないか。

「え、兄ちゃん何してんの」

「別に」

「ハルさん、けっこ前からそこにいましたよ」

マジでか。

こえーよ、なにしてんだよ。

「見張らなくても、手出したりしませんよう」

「別にそんなんじゃないよ」

あたりまえだ！私なんかに手出そうと思うわけないじゃんか！

「つーかなんで兄ちゃん家にいんの？いつもいないくせに、なんで今日に限っていんの？不良なんだから出かければいいじゃん。それで部屋貸してよ」

「不良言うな」

「俺はナツ先輩のベッドで寝るんで大丈夫ですよ」

「おい！何言ってるの？なんで私のベッドをお前が使うの？そして私にどうしろと！？床か？私なんか床に転がってるでも言うつもりか？」

「こつすればいいじゃないですか」

そう言つて榎原はするりと私の横へ転がってきた。  
しかもきちんと布団の中へ入って。

え、なにこれ。

添い寝？これって添い寝つてやつ？

妙に背中があつたかいんですけど。そんでもってなんか二本の腕が腹にまわってきたんですけど。

「ナツ先輩、固まっちゃってる？」

榎原が耳元でなんか言っただけど、ちよつと今ムリ。



こんな展開マンガとかで見たことあるけど、自分ちよつとムリ。

「おい」

はっと我に返ると、いつのまにやら兄が榎原をずるりと引きずって  
いた。

どうやら自分の部屋へ連行するようだ。

ありがとう兄ちゃん。

さっきはこえーとか思っでごめんよ。

「兄ちゃん。そいつボコっちゃって」

親指をたてて了解の合図をする兄。

そして私も親指をぐつとたてた。

榎原、グッドラック。

よくある少女漫画的ハプニング要素など、私の人生には無関係なの  
である。

## 真夜中の攻防（後書き）

お兄ちゃんは地味にシスコンなのです

## たまには乙女のように

本日のセボン又安藤。

それはもう忙しいのなんのって。

土曜日だもの、学校ないしね。

うちの王子様フルでバイト入ってますしね。

「あの！コーヒー追加くださいっ！」

「わ、私も！」

各テーブルから次々と手があがる。

お客様方、それ何杯目ですか？腹大丈夫ですか？

榎原と話すきっかけづくりの行為だ、ということは言うまでもないね。

奴は忙しそうに店内を動き回っているが、私はそんな光景を他人事のように眺めている。

すまん。可哀想だとは思いますが、君目当てなのだから仕方がないのだよ。

榎原目当てで通い詰めている人がけっこういて、すっかり顔なじみになってしまった。

といっても、私なんて見えてもいないだろうから一方的な顔なじみだけれども。

ちなみに学校の人には榎原がここでバイトしてることはバレてない。榎原に必死に（それはもう必死に）口止めたのを、律儀に守ってくれているらしい。

万が一、うちの制服着てる人が入ってきたら速攻隠れるつもりである。

そのための逃げ道はすでに確認済みだ。

ちなみに説明すると、カウンター裏の下らへんをコソコソ這いながら裏口へ抜けて我が家へ一直線コースである。

「はあ、今日もプリンスは素敵ねえ」

私の近くにいるお客さんから、ため息混じりの独り言が聞こえてきました。

私は貴方に聞きたい。

あれでも素敵に見えるんですか？

間抜け面にしか見えないのは私だけですか？

あごにでっかいバンソウコウ貼っていても、イケメンはイケメンっ  
てか。

昨夜兄ちゃんにボコられた証も、奴のまぶしさを軽減させることは  
できないってか。  
ちっ。

そういえば昨日は結局、兄ちゃんの部屋の床で寝たらしい。

ボコった後にブランケットをかけてやる兄。

アメとムチですな。

ツンとデレですな。

こちらら妙に目が冴えちゃったもんで明け方まで冬ソナの続き見て  
たっというのに、奴は非常にすつきりした様子で起きてきやがった。  
そして遠慮というものを知らないようで、朝ごはんおかわりしまく  
ってた。

腹立つわー。

この目の下のクマ、誰のせいだと思ってんだこの野郎。

「ナツ、ちょっと出かけてくるから店頼んだよ」

「はい。おじいさん行ってらっしゃい」

まあ、榎原さえいりゃ店回るから。

ていうか私いなくてもいいんじゃないの。

なんて思っただ、カウターの後ろでこっさりマンガ読んでた。けっこうガッツリ読んだ。

うん、やっぱり最高！ガラスの仮面！

途中けっこう間あいてるからなく、絵変わってっけど仕方ないやね。私はアレだな、まばたき禁止の人形役らへんの話が好きだわ。

でもムリっしょ。いくらなんでもまばたきせずにはいられないっしょ。

人間だもの。(byあいだみつを)

ガラスの仮面最新刊を読み終わって、ふと顔をあげた。  
ん？

榎原が困った顔してる。

相手してるのって・・・常連の女の子だ。つまり榎原の追っかけ。なにか話してるけどよく聞こえないなあ。

さりげなく近寄ってみよう。

「バイト終わるまで待つてるから！いいでしょう？」

「いやあ、ちょっと・・・」

「毎回そう言うじゃん！今日こそは絶対デートしてもらっからね」

「すみませんけど・・・」

「じゃあ、いつなら行けるの？」

うわ～

痛いなあ、あの人。肉食女子ってすげえな。

どう見ても榎原嫌がってんじゃない。

店のお客さんだから気を使って強く断れないんだろうな。

「もう！こうなったら今日終わるまで居続けてやるから」

「営業妨害なんですけど。そんなもってコイツ嫌がってるんで、これ以上しつこくするの止めてください」

「なんですって!?!」

しまった・・・。

つい口を挟んでしまった。

「あんだ、今なんて言った？」

怒ってる怒ってる。やっちゃまったなー私。

いやあ、でもさ。好きじゃないんだよねああいうの。  
イラツとしちゃったんだよね。

「店員のくせになんて失礼な態度なの。私は客よ?こんなさびれた店に来てやってるだけありがたいと思いなさいよ。榎原君がいなきや誰がこんな店来るもんですか」

カチン。

うん。久しぶりに本気でカチンときた。

きつと私の全身から、ぶわっと冷ややかな空気が流れ出た事だろう。  
いや、落ち着け。落ち着くんだ私。

ムカついたけど、ムカついてない演技をするんだ。

ガラスの仮面をかぶりなさい、ナツ。

はい!月影先生、私がんばります!

「もしかしてあんだも榎原君のこと狙ってるわけ?ブスはひっこんでなさいよ。榎原君、変な虫が調子乗る前にバイト辞めたほうがいいんじゃない?」

パリーン。

ガラスの仮面、割れました。  
すみません月影先生。あっけなく割っちまいました。

「そっちのほうがよくぼど調子のっ・・・」  
「ナツ先輩、かわいいですけど」

おいコラ、榎原！

しゃべってる途中でしようがっ！！言葉かぶせるんじゃないよ！  
・・・ん？今、なんだった？

「・・・え？榎原、君？」

いけすかない女が目ん玉を丸くして、榎原を凝視する。  
というか店内の全てが榎原に注目している。私もだ。  
榎原はひょうひょうとした態度で腕を組んだ。

「さっきナツ先輩のことブスって言いましたけど、俺から見たらかわいいですよ？少なくともあなたより百倍も」

・・・店内が凍りついたような気がする。

「ちよ、なっ！あんた・・・なに、言っ・・・んがっ、舌かんだ！」

「じじいところも」

はあ！？

なに言ってるんのコイツ！？

「この店とナツ先輩のこと、バカにするのはやめてください。俺はそういう人は好きになりません」

いつもニコニコしてる榎原が、いつになく真顔だ。  
へえ、こんな顔できるんだ。

ぼうつと榎原を眺めていたら、いけすかない女が目には涙をためて飛び出していった。

「あぁっ！食い逃げ！」

「俺が払います。お客さん一人減らしちゃったお詫びに……。すみませんでした」

ペコリと頭を下げる榎原。

なんで。

なんであんなに頭を下げるの。

「い、いいよ！あんなに払う必要なんてない！」

「いや、俺が怒らせちゃいましたから」

「もとはといえば私が怒らせただもん」

「結果的に、俺の言った言葉が原因だと思いますけど」

・・・まあ、そうかもね。

「…………じゃ、お支払いお願いします」

突然くるつきびすを返してカウンターの中に引っ込んだ私の後を、榎原がついてくる。

「ナツ先輩？」

背後から私の顔を覗き込もうとしてくるので、サッとよける。  
そしてカウンターの中にしゃがみこんでやった。



そしたら奴もしゃがみこんできて、また覗きこもうとするので更によける。

それを何度か繰り返してたら、榎原がクスクス笑いだした。

「ナツ先輩、耳まつ赤ですけど。かわいいって言ったの思いだして照れてるんですか？」

「て、照れてない！」

一段と顔に熱がたまっていくのを感じる。

私、照れるとかそういうガラじゃないのに。

だけど、しょうがない。

人間なもの。

たまには照れる事だってありますよ。

「あはは、ほんとかわいい〜」

くっそう、からかって遊んでやがる。

「ただいま。ん？二人ともこんなところで何してるんだい？」

おじいさんが帰ってきた。

その隙について私は脱走した。捨て台詞をはきながら。

「今日うち来るなよ！絶対、英語教えたりしないかんね！」

事前に逃げ道を確認しておいて良かった、と心から思った私でした。

〜後日〜

「ナツ先輩！見てください！」

「31点・・・」

「ギリギリ赤点まぬがれました！ナツ先輩が裏切ったから、どうなるとかと思いましたけどね」

「自分の力でなんとかなっただじゃん。二度と私に家庭教師なんか頼まないように」

「次は来週の数学対策お願いします」

「話を聞け！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5714y/>

---

まぶしい人は嫌いです

2011年11月26日00時55分発行